

## 大学教育における教授・学習過程と 学生の発達過程の関連 (13) —まとめ—

(教育心理学教室) 佐藤 公代

### The Teaching-Learning Process in University Education(13) — Summary —

Kimiyo SATOU

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

#### (問題と目的)

佐藤の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連(1)～(14)」から何が見出されたのかをまとめることにする。今まで公表された論文以外に2つ追加して14個の論文でまとめることにする。

#### (方法)

(1)～(14)の論文を分析する。

#### (結果と考察)

(1)「集中講義の授業評価による教授・学習過程の検討」において、内田氏の集中講義に対して、学生の書くコメント用紙からモデル質問を選択して、その内容についての変化を調べたことにより批判的に授業を捉え、また質問や疑問点、コメントがしだいに的を得た生産的な文章へと変化していく過程が読み取れた。これによって、3日半の短期間のうちに、授業者の言葉を批判的に受け取ろうとする態度が見られるようになっていくことが窺われる。学生が集中講義を受けてどのように評価したかについて集中講義終了時に実施した授業評価調査の結果から見て概ね授業への満足度は高く、受講者の3分の1が、「またこういう授業を受けたい」「この授業ではよく考え、疑問をもつことの重要さがわかった」「先生が提示する研究についてもよく吟味して受け取る必要があることがわかった」という内観を自由記述欄に記入していた。これらの内観と最終日に提出してもらった彼らのテストレポートの内容と成績と併せて推測すると、かれら

は「ことばの獲得と教育」の教授過程で領域知識(宣言的知識)を習得したことがわかる。

(2)「教育心理のカリキュラムに関する検討」において、「卒論の指導教員決定時期について」は2回生の時期に決定してほしいという回答が44.1%と一番多かった。1回生は4年次になってからという回答が66.7%と一番多く、2,3,4回生は2年次になってからという回答がそれぞれ、33.3%, 75%, 75%と一番多く、実体験者とそうでない体験者との間に明らかな違いが見いだせる。「授業の順番、前倒しについて」は1回生は当然ながら「わからない」(66.7%), 2回生は「他の科目も前倒しにしてほしい」(66.7%), 3回生は「今まで通りでよい」(37.5%), 4回生は「わからない」(50%)が多かった。「検査法」「実験法」「調査法」のレポートは毎週提出することになっている。「大変であるが心理学が勉強できて充実感を覚える」という回答が52.9%と一番多く、2,3,4回生の回答もそれぞれ55.6%, 87.5%, 62.5%と多いが、1回生では「わからない」66.7%となっている。これは実際レポートを書いて心理学の学習に同一性を覚え、達成感を味わっているのであろう。「しんどいので心理学の勉強をやめたいと思う」は1,2,4回生で、それぞれ11.1%, 11.1%, 12.5%と1人ずつ回答している。これは不安傾向の強い人なのでであろう。「検査法隔年開講」について「同じ回生の人だけでやりたい」という回答が61.8%と一番多く、2,3回生がそれぞれ77.8%, 87.5%と多い。1,4回生は「別な回生の人

と一緒に良い」がそれぞれ55.6%、50%と多い。これは経験者と未経験者の違いの回答である。「教育心理専修生になり心理学教室に所属して」について「よかった」が70.6%とどの回生でも多く、ついで「非常によかった」(17.6%)となり、「どちらでもない」は1回生で66.7%、2回生で11.1%であるが、「よくなかった」「全くよくなかった」は誰もおらず、ほっとしている。「心理学関係の授業を増やすかどうか」について「ふやしてほしい」は73.5%と一番多く、2, 3, 4回生がそれぞれ88.9%、100%、75%である。1回生は「わからない」44.4%が多い。「へらしてほしい」はどの回生にもなかった。それは当然のことであろう。回生があがるにつれ、教員免許取得とピーク制としての教育心理専修との両立に悩みをもつものが自由記述から読み取れる。

(3)「指導教員決定要因の検討」において要因を大別すると教員側の要因、学生側の要因となり、具体的には、研究内容、教員の人柄、指導の仕方、研究室の雰囲気、学生の性格、友達関係、研究の流れとなる。10個の要因を見つけたので列挙しておく。「研究内容が一致しているかどうか」「相性が合うかどうか」「指導の仕方が厳しいか優しいか」「指導の仕方が1対1か、1対多数か」「研究室の雰囲気において縦の関係重視か、重視しないか」「学生の興味・関心」「友達関係で」「学生の性格と教員の性格関係」「学担教員で基礎セミナーをやったかどうか」「授業とのかかわり」。以上から魅力ある大学作り、研究、教育作り、人間作りという3つの課題を達成させる必要がある。

(4)「心理学文献講読のゼミに対する学生の行動について」学生と教員の間でズレが起こるのを少なくするためには教育目標を一致させなければならない。出席については全部出席が5人(33%)、遅刻については遅刻をしないが7人(47%)ということで教員としては不満足である。予習をして質問用紙を決められた日時までに提出することについては65%の学生はついてきている。予習についてできるだけ自分で調べた学生は10人(67%)でやはり不満は残る。予習時間について30分～1時間くらいが7人(47%)で量的にも質的にも良くない。復習時間について復習をしないが8人(53%)もいてびっくりした。テキストの内容についてどれも理解できていないのは4人(31%)もいるが、難しいテキ

ストであり、4回生の卒業論文作成までに徐々にわかってもらえれば良いのでそれほど気にはしていない。理解の程度について理解できたのは7人(47%)で幅広く理解してもらい、自分に興味のあるところをみつけてもらえれば良かったのである。レポーターとしてやややれたのは10人(66%)で一番きついやり方を学生に指示していたにもかかわらず、何とかついてきている。

(5)「心理学文献講読のゼミに対する教員と学生のズレ」において、授業評価に対するアンケートから、ゼミ授業は楽しかった78%、役だった67%、発表力が身についた44%、自主的になった44%、飲み物、手作りお菓子を出していることについて良い100%、授業の内容について難しい78%、予習について質問、意見、感想などを毎回書いて提出することに厳しい2人(22%)、わからない6人(67%)、たやすい1人(11%)である。専攻の学生なのだから予習、復習は当然という意識を1回生から持たせるための工夫が必要である。学生の行動評価について全部出席5人(56%)で出席率は良い方である。遅刻について遅刻をしない3人(33%)で遅刻対策が必要になってくる。質問用紙を決められた日時までに毎回提出した9人(100%)であるが、良く見せようと回答している。予習についてできるだけ自分で調べた4人(44%)、調べていない5人(56%)もいる。調べ方についてもきめ細かな指導が必要である。予習時間について約2時間4人(44%)もいるが、量的だけでなく質的分析も大事である。復習時間について約1時間2人(22%)であるが、復習をしない6人(67%)もいる。定着を考えると復習は大事である。テキストの内容について全部理解できた2人(22%)で難しさは変わらないが、必要なときに利用する形で選んでいるのできっかけ作りに利用してほしい。理解の程度について理解できた4人(44%)、わからない5人(55%)で不消化を起こしているようであるが、長い目で見てみよう。レポーターとしてやややれた6人(67%)であるが、自己効力感や達成動機との関連でも考えなければならない。

(6)「批判的思考形成に及ぼす集団討議学習の役割」において、共通教育における批判的思考形成の授業を考えた。人数制限にテストをすることについて良い9人(36%)、わからない10人(40%)、悪い6人(24%)

で学生にとってはどちらともいえないということになる。30人をきっていたので質的に高い者を選ぶという意図はなくなった。グループの人数について5人ずつが適当である20人(80%)でやりやすかったのであろう。グループの固定化について、固定した方が良い13人(54%)、固定しない方が良い11人(46%)で優劣はなさそうである。テーマの決定について色々なテーマの方が良い20人(83%)で、一つに決まっていた方が良い4人(17%)よりは多かった。テーマのグループ決定について、各グループの自主性に任せた方が良い22人(88%)で、全グループとも同じ方が良い3人(12%)よりは多かった。ここでも各グループの興味の持ち方が如何にバラバラであるかを物語っている。グループ学習の評価について良い21人(84%)と認めている。議論が深まるためにリーダーは誰でもなるものである18人(72%)で、リーダーの存在が必要である7人(28%)より多かった。各自が能動的に活動することである。遅刻者対策として先生に頼らず自分たちで何とかしようという意気込み9人(39%)は感じられる。しかし、見逃してほしい7人(30%)ということに関しては甘えがある。叱らなくとも遅刻をしてはいけない意識をもたせることが外発的動機づけから内発的動機づけに内面化する機会をえることでもある。今後面白いテーマを見つけて議論したいかどうかについてメンバー同士議論したい20人(80%)で、メンバー同士議論したくない5人(20%)より多かった。各グループの成員同士の結びつきが強く議論することに慣れが生じてきたのかも知れない。15回の授業について22人(88%)の学生が楽しんでいて、各グループにおける出席状況について一番悪いのは60%、一番良いのは100%である。法文学部、教育学部、工学部の学生が入り混じっており、班構成の際は学生の自主性に任せている。各自のレポートを採点してみるとそれなりにグループ学習の軌跡がみられ徐々に変化していくプロセスも読み取れた。以上から、グループ学習を楽しく感じ効果もみられた。テーマの設定を色々に変えてもグループ毎に毎回同じようにしたほうが統一が取れて良かった。

(7)「指導教員決定要因の思考実験(1)」において、学生との信頼関係無しには指導は無理であり、如何に信頼関係を築くかが指導教員の力量であり、プロ意識をも

つことである。特に、院生の場合は、問題意識を大事に導いていくことによって底力を発揮するのである。

(8)「指導教員決定要因の思考実験(2)」において、信頼関係のないところには色々なトラブルが起こる。トラブル解消には人の良い面をみることとどんな人からも学ぶ謙虚な姿勢が必要である。

(9)「大学生の学力低下という記事をめぐっての学生の判断」において、大学生の学力低下という記事全般に対して、78%の学生が大学生の学力低下問題を「抜本的な大学改革という視点から見直さないといけない」と賛成している。自主的・創造的な学生を育てたいと思ったらについて83%の学生がある程度の指導を望んでいる。教員の熱心さと学生の評価にズレがみられるのは信頼関係の重要性39%をあげている。大学生の規範意識について、授業中何をしてもよいかについては73%の学生がまともな回答をしている。大学の授業に興味をもつ方法は学問の内容に興味をもつことである80%で真理の探究が大事であることがわかる。以上から、自主的・創造的な学生を育てるための大学の授業を見直す必要性、そのためにはお互い信頼関係をもって、学問の面白さを教え学ぶことであることが見出された。

(10)「教育心理学特講(生涯発達心理学)の集中講義の授業評価について」において、授業は楽しかった44%、どちらでもない53%、つまらなかった3%である。授業は役だった84%、どちらでもない13%、役立たなかった3%である。授業は易しかった44%、どちらでもない38%、難しかった18%である。把握できた78%、わからない19%、把握できていない3%である。色々な学年、色々な専攻の学生が入り混じった授業に対して良い59.5%、わからない25%、良くない15.5%である。集中してやるので全貌がわかって良い72%、わからない22%、良くない6%である。数字だけ並べたが学生の理由付けを両面から掲載すると集中講義の効用と限界が明らかにできる。学年差があるのでアンケート結果にばらつきがみられ、集中講義の独自性があらわれている。時間配分を上手にやったり、各学年、各専攻生に配慮してきめ細かい準備が必要である。

(11)「メールによる卒業論文の指導に関する効用と限界」において、メールのやりとりから効用よりも限界の方に問題点が多く、ニュアンスの限界がみられる。

(12)「心理学文献講読の授業を通して」において、予習は難しかった100%、興味があったのは社会心理学36%、臨床心理学36%、発達心理学19%である。役だったのは発達心理学45%、臨床心理学27%、社会心理学19%、認知心理学(記憶、思考、言語)9%である。質問に対して先生の答えは理解できた55%、どちらでもない45%である。手作りお菓子、飲み物を出してもらって嬉しい100%である。討論が盛り上がりなかった理由で人前で話すのが苦手55%、その他45%である。心理学の概論が理解できた55%、どちらでもない45%である。36%の学生が自由記述をした。学生が難しいテキストを徐々に読みこなし、予習をして質問事項を書いてくることにだんだん慣れてくる。そして、現代の世相を反映して「臨床心理学」「社会心理学」「発達心理学」に学生の興味は偏ってくる。それでも心理学専修生なので心理学に興味をもち勉学意欲は高い。つまり、難しいテキストでありながら教育心理専修生なので予習を積極的に行い、質問項目を書いてきて、何とか理解しようという意欲にもえていた。「臨床心理学」「社会心理学」「発達心理学」に興味をもち各自の行動にかかっているようである。

(13)「討論形式による授業について」において、講義—グループ討論—各班からの討議内容報告とまとめという新形式の新しさに興味をもった88%、わからない9%、興味がなかった3%である。討論形式の授業は役だった74%、わからない13%、役立たなかった13%である。〇〇と子どもシリーズに興味をもった箇所は、親と子ども13%、教師と子ども13%、授業と子ども7%、塾と子ども10%、いじめと子ども24%、校則・体罰と子ども7%、思春期と子ども10%、読書・漫画と子ども10%、パソコン・テレビゲームと子ども3%、対人関係と子ども3%である。30分講義、30分討議、30分各班からの討議内容報告と筆者のまとめという時間配分について良い50%、わからない21%、悪い16%である。グループの作り方において良い53%、わからない34%、悪い13%である。発表者が毎回変わることに良い84%、わからない16%である。遅刻について無しが37%、1回17%、2回17%、3回10%、4回6%、5回3%、6回10%で、遅刻者はいつも遅刻、遅刻しない学生は毎回しないというように色分けされた。教員

は遅刻をしないで態度で示そうとしたが後ろ姿を見て育たないのかと思った。欠席について無し48%、1回23%、2回10%、3回16%、4回3%である。手記の分析とレポートとの関連から各自の知的能力はアップしていることがわかった。

(14)「多人数授業と少数人数授業との比較」において、多人数の授業の方26%、両方とも35%、少人数の授業の方39%が好きという回答をしている。授業の内容の理解しやすさについては、多人数の授業の方4%、両方とも29%、少人数の授業の方67%と回答している。発表力について高まるのは多人数の授業の方10%、両方とも11%、少人数の授業の方79%の回答である。私語が多いのは少人数の授業の方1%、両方とも9%、多人数の授業の方90%と圧倒的に多い。内職が多いのは少人数の授業の方1%、両方とも14%、多人数の授業の方85%となっている。居眠りが多いのは少人数の授業の方1%、両方とも28%、多人数の授業の方71%と回答している。400人以上の授業は成り立たないということについてそうである46%、そうではない54%となっている。30人くらいの授業が理想であるということについてそうではない48%、そうである52%で肯定的回答が多い。理由付けの分析から多人数の授業が好きな学生と少人数の授業が好きな学生の割合は条件つきである。少人数の授業の方が内容の理解しやすさ、発表力の高まりがあげられる。多人数の授業では私語、内職、居眠りの多さが目立つ。400人以上の授業は成り立たないという見解に対して必ずしも肯定的な見解ではない。30人くらいの授業が理想であるという見解に対しては肯定的な見解があげられる。以上から、教員の力量による学生のやる気によってどのような形態でもこなせるのかも知れない。

#### (引用文献)

佐藤公代の「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連」というテーマの愛媛大学教育学部紀要と愛媛大学教育学部附属教育実践総合センター紀要を参照のこと。14個のうち2個を追加してまとめた。